
Jack of all trades

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Jack of all trades

【Zコード】

N1149BA

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

「何でも屋」で名のしれている彰士とちあの人組。 そんな二人にとある依頼が !? 短編はコチラ【<http://niconode.sysosetu.com/s5635a/>】

case1 ストーカー（前書き）

編集めんどくせーかつたです
やめました 噛みました やめました

case1 ストーカー

るるる、と鳴り響く電話の音。出たのは長身の一十代に入つてそ
うな好青年。

彼は吸つていた煙草を口から外し、「もしもしいー？」と酒に酔つ
たような（ていうか酔つてるんだけど）声を出す。

「……依頼だな、ああ、分かつた、あ、いえ！分かりましたあ～～

」

上から田線な態度が一変する。声色が気持ち悪い。

「ちあ、出るぞ」

ちあ、というのは彼・彰士のパートナーであり仕事仲間。
容貌こそまるで女の子だが彼は男。茶髪のロングストレートは地毛
である。

こう見ていると、クールな彼氏に少し童顔な彼女という恋人同士に
しか見えないだろう。

「お仕事なの？」

まあ、恋人同士に見えるときは、彼らの仕事を知らぬ間だけだろ
う。

「今日は護衛だ」

「ふーん、そう」

淡々と短くかつスピーディーに話をする一人。

「服は？」と、ちあ。

「あつちで手配してくれる」

「OK、じゃ、行こうか」

「車で行くが高級車はまずいよな

「歩いて、で」

「……」

* *

ぴん、ぽーん…、と。恨みも込めて彰士はインター ホンを押す。別段近いわけでもなくだが遠いとも言い難い…そんな微妙な距離を「まだ時間がある」「ウォーキング」という理由で（逆らうと結果が怖い）歩いてきたのだ。

当人はとても満足げだったので、怒る気もせずせめてもとインター ホンにハツ当たりする情けない大人だった。

ドア…というより扉が開くのがすごく遅い。本当にしばらくしてバタバタと数人の足音。

「…玄関までが遠いんだね」

「俺たちの家もだいぶデカいけどなあ」

「」のうちに豪邸よりは遙かに小さいが。

「お、お待たせしました！何分、邸内でも迷つてしまい…」

迷うほどの大ささである。玄関だけ見ても、一軒家一つ分…ぐらいあつた。無論比喩だが…比喩…にならないぐら。

「…お邪魔します」

「」案内申し上げます

「問題ないです！」一人で行けます！」

「はあ！？何言つてんのお前！！」

「うつさい。お仕事多そですしお休みなつてていーですよー」
ひらひら、と手を振る。メイドさん達は「では、お言葉に甘えて」と言つて本当に帰つてしまつた。

「…おい、いーのかよ」

「大丈夫。護衛をするんだつたら盜聴器あげないとね」
おみやげ

「…ふん」

* *

「おお！よく来てくださつた！」
「遅れて申し訳ない。手土産をやるうつか」

と、自分の手柄でもない盗聴器を『やがれやがれ』と投げてへ
彰士。

田分量でも30はあるだろ!』

「……」

「盗聴器だよ。この屋敷は広いからまだあると懇ひはい、僕、あ、
いや、『私たち』の取れる分だけ取つて來たよ」

「……申し訳、ありません……」

ゆつくりと、この屋敷の主は謝つた。

「謝罪なんかいらねーよ、内容をくれ」

「……わかりました」

case2 ストーカー？

「……と言つて『ござります』

「娘さんがねえ…」

「……はい。」

内容は、こうだった。

彼には一人娘がいて、とても綺麗で可愛くて優しくてピアノが上手くて成績優秀。

絵に描いたようなまさにお嬢様、だった。

彼女にも欠点があつて…それは、「男嫌い」。年も18。結婚も控えているのに「男嫌い」。

そして、ある日。彼女は嫌ながらも父のため、お見合いをした。きちんと断つたのだが、その相手が相手で諦めきれず財力を駆使したストーカー行為を始めたのだ。

ここまで聞けばわかると思うが、彼ら二人の任務は『ストーカー行為から彼女を守り、ストーカー行為を止める』こと。

「……だけどなあ…」

「何か…？」

「俺ら男じやん？」

「え？いや、でも、ちあ様は…」

「私は男だよ。女装好きかな」

「…、まあいいです。隣室に服を用意してありますので」

「えーっと、まず、お嬢様に会う…か」

「それは私がする？」

「ん、頼んだ」

護衛と言えば、やはりメイドや執事。ちあはメイド服で、彰士が執事。

そして、今はその“お嬢様”的自室前である。
ちあが、コンコンと一度ほどノックすると中から「ひづれ」と声が返
つて来た。

失礼します」

女装したちあが男嫌いの少女の部屋へ一人入つていつた。

(…中で何があつても俺はお前を忘れない)

「何イ――――!?

あ井つの驚き

(、 (H) 、) 間 (、 (H) 、)

「……よ、寄らないで！－あ、あなたが新しい護衛ね……精々死はないことね！－！」

どんな捨て台詞。彼女は、この風間家の一人娘・菜苗。ななみ

「大丈夫ですよーう。私たちはお嬢様の身を守る者です。死にはしません」

ません

「11人です」

「え？」

11人。英語で言いましょうか? elevenですよ。

菜苗は、一わ、わかつてゐるわよ!!」と驚きと血潮に男がいるという状況に震えた声を混ぜ合わせ言つ。

「何故知つてゐるのか、なんて後回しです。さ、今日は学校に行く

田でしょ」「

「…嫌よ、行きたくないわ」

「……無理強いはしませんよ。じゃ、私たちは出でいきますかね。

行こ、彰士

「ん？ああ、煙草吸いてえしな」

彼女が学校に行かない理由。それは単純。

“みんなを傷つけたくないから”。

彼女にふりかかっている“不幸”^{ストーカー}は、ただ個人情報を盗んだり、後ろについてきているだけじゃない。周りに近づくものをすべて抹殺し、消した。

だから、護衛が、死んだ。

彼女は、優しいんだ。

傷つくのは苦しむのは悲しいのは私一人でいい。そつやつて、

「そつやつて生きてきたんだろうなあのガキは」

「だらうね。」

護衛が、守るどいろか守られる立場になっていた。皮肉な話である。

「さて、ちょっと豪邸さんの外周を掃除するかね」「僕もする」

と、ちあは黒い長い傘を取り出した。

ちあが元々小さいのもそうだが、その傘には60センチでも55センチでもましてや70センチでもなかつた。

100センチ。1メートル傘。彼はこれを用いて 戰つのだ。

* *

庭のストーカーたちが片付いたと同時に、菜苗の部屋から彼女のものらしき悲鳴。

きっと一人を外に追いやりように外周に雑魚を並べたのは、部屋を、菜苗を一人にするためだろう。

今更気付いてなんだ、って話。

「 ッチ！ 手が早すぎんじゃねーの！？」

「 …どうせメイドとかにでも紛れてんでしょう」

菜苗の部屋に繋がるテラスの真下に来る。

「 …鈍ってるから行けるかな」

「 行けるんじゃねーよ。行くんだよ」

テラスとは逆方向にある大木に向かって走る二人。

それを器用に蹴り、跳躍する。勢いあまり、ガラスをぶち破つて入る。

「 お嬢様あ？ 大丈夫 」

と、問う暇もない。田の前には、ナイフを突きつけられた主の姿。ななえ

「 …ち…おい、離せよ」

「 嫌だと、言えば？」

「 殺^やるしかねーな」

case 3 ストーカー？

「殺るしかねーな」

「おやおや、怖い」

と、回していた手とナイフを外す。

当の菜苗は肩で大きく息をしていた。相当、怖かつたんだろう。

「……たーだーし」

「？」

「殺るのは、俺じゃねーよ」

「な、しまつ」

“もう一人を忘れていた”。

気配に気づいて振り返ったのは、もう遅い。

後ろには思い切り1メートル傘を振りかぶり、鬼のよつな形相で居る ちあがいた。

あとは一瞬。傘の“バキ”という音でなく、まるで鉛でも当たつような“ゴン”という鈍い音。

「……女じやねーのに触んなクズ」

一字一句間違えず、二人は言った。

「……その、ありがとう…」

「いや、そーいう任務だし」

「はい。問題ないです！」

「……ちょっと、男の人見直しました」

ぽつりといった言葉は、ちあにしか届かなかつた。

仲間を一人殺された敵側は、数日間何の反応も見せなかつた。だからこそ、警戒が必要である。

氣を抜かせつつ、奇襲。それは当然の策戦であり、作戦。

あの日から、菜苗は学校に行くようになった。

きっと、一人の強さを認め安心したんだろう。いいことである。そして当然の「」とく女子校のため入校はちあだけが許された。

一人寂しく彰士は外回りの護衛。

「ショージーーー！」

と、玄関から駆けてくるのはちあ。

「お、おい、お前護衛…………」

「……それどこにいじやないーーーが、菜苗が消えたーーー！」

「……ああ？」

ちあの一言いつとおりでは、授業と授業の合間。つまり、休み時間に消えたのだ。

「……ちあ、今回は手強いぜ」

ちあが護衛を怠つたんじやない。その護衛を上回るほどの 技術。
ぴ、ぴ、と自分の携帯をいじる彰士。と、それを覗き込むちあ。あらかじめ、発信機をつけておいたのだ。無論秘密だが。

「いた！　尋常じやねえ速さだな……？って、あれ？俺らの……上？」

と、上を向くと

「ぱらぱら、ヒベリロフターが飛んでいた。

「つぐそーーーちあーーー撃ち落とせるか！？」
「え、やだ。出来るけど、傘無駄になる
「つぐそーーー！」

いろいろな意味で怒りの混じつた「くそ」を吐いた。

発信機に導かれ、たどり着いたのは廃工場。

* *

まるで、一人をここで待つて居ようがつた。否、誘つて居るんだ
るつ。

「いいか、遅れたら蜂の巣だ。」

「いつせーの、でー、で走るんでしょ」

「ああ、いつせーの…で！」

「人が全く同じ速度で走り出すと、銃弾の雨。ちあはそれを“傘
でなぎ払つていぐ”。

建物の中に入ると、ロープに縛られた菜苗と犯人、否、見合い相手
がいた。

「お疲れ様、ボディーガードさん」

「なめてもらひうと困るぜ」

「そうだよ。ボディーガードは“仕事内容”。私たちの仕事は」

「「何でも屋」」a c k o f a l l t r a d e s 「」」

それだけ聞くと、見合い相手の血の気が引く。

「……は…ふ…ははははーわ、笑わせてくれる…嘘をつくな…」

その組織はひ弱そうなガキと二十代の男だけじゃなかつたはずだ
ぞ！！」

流石に名前は知つて居るらしい。どれほど、有名で強いのかを。

「無理だよ」

「何がだ」

「ごめんね」

「だから…」

そこで、彼はハツとする。

“周りの気配がないことに”。 “彼らに奇襲が銃弾が当たらないこ
とに”。

「全部、倒しちゃつたんだ」

case 4 ストーカー？

「全部、倒しちゃったんだ」

「…………」

「いつの間に？それは、ほんの少し前。銃弾の函を、函の中をぐぐつてきたとき。

“ちあは、傘で弾丸を全てなぎ払った”

つまり、つまり

それは、跳ね返つたことになる。ここにひと

「……は、跳ね返しつつ……当たたとこづのか？――」

「そう」

そして、見合いで相手は、耳を澄ます。

「…………嘘だ、嘘だ……それだけじゃない……全て、全て“急所を外してある”……だと……？」

そう、“生きてこる”。当たったのは腕や太ももなど、死にほし

ない場所。

ちあは、弾丸の雨をよけつつ、更に相手を狙いだが殺さず。そして自分より背が遙かに高い彰士に合図せ走る。

この行為を全てやつてのけたのだ。

「……ひ、ひい……わ、わたしは一体誰を……倒さうと……」

自分の愚かさ、弱さに気が付く。

「そう、そして更に。こんなちつこちつあでも“この程度のこと”ができる。

“つーことは、単純に？”

「あ……」、殺さな……で……な、なんでもするー金かー?・金だなー?・
ぐぐ、と強く強く拳を握る。

「俺はもつと強いつことだよーーー！」

渾身の一発。

殴られた本人はもつと痛いが、聞いている“音”だけでもだいぶ大きく、工場が響く構造だからと言つても、その殴つた音は、鼓膜を破るかとも思わせた。

「俺たちに挑むんじゃ、一〇〇年あっても足りねーよ、クズ」

こうして、タラシなもやし相手をした最強の仕事は終わつた。

* * *

後日、その事実を知つた彼の両親は、物凄く腫れた頬を携えた本人を連れ謝罪に来た。

これで、彼ら何でも屋の仕事は、終わり。報酬（相手もくれたので二倍）をしつかりもらつて、帰るところだつた。

「ま、待つて……」

と、二人を呼び止めたのは意外な人物。

菜苗だつた。

「ひゅう」と、ちあ。

「…？何だよ。もう仕事は終わつたぜ」

「ううん、…それについては、ありがとう。新しく一步踏み出せるわ」

につこり、笑つた。本当の彼女。

不安も何もない。檻から飛び出せた自由な笑顔。

その笑顔を見て二人は安心した。

「彰士さん、ちょっと耳貸して

「？」

言われた通りに耳を貸すため腰を下げる

「… も…」

頬に軽くキスされた。

「… 立派な女になつて、貴方のもとへもつて一度向かいますから」

「ちよ、あ、え…？」

「やるじやん。見直したぜ、しょーじやん？？」

「… むせえ…！」

まるで表情を隠す様に、煙草を吸う。

それを見て、ちあが不適に笑む。

「… きっと、菜苗ちゃんが好きになつたのは他でも無い彰士の優しさ、だよね

彼に聞こえそうで聞こえない声。

そんな微妙な声で、そつと口に早歩きの彼を追つた。

「これだけありやしばらくは過」せるな
と、貰つた大金をニヤニヤ眺める彰士。
満足そうにコーヒーを飲んだ。

「ああ？ って、ブ―――!?」

『の前にしたのは女子の制服を着たぢあ
たがそれは別に夢では

「おま、それ……女子校のじゅん……」

「うん！ なつかなか手に入らなくてねんこくるり、と回ってみせた。

スカートを物凄く短く折つてあるので風で下着が見えそうだ。

おいた回された
ヒヨーかハマヒロ回数が二回目でもなー弟前二二〇超えてんだぞ

20超えの男には欲情しねーよ…」

「ハ、アタシが、おみやげ？」

「まあ、われは少いとお極めただよ」

「先に言え」

客室で待つていたのは、高校生くらいだろうか。美人な子だった。

「はいはい。どういつたご用件で」

「先生？」

「は、はい。私女子校に通つてゐるんですが……最近来たばかりの先生

「おやじの、あ、なー」「に…その、わ…」

「脅される？あ、はい『コーヒー』だよーっ？」和む、といふ空氣を読まないちあである。

「あ、ありがとうございます..。実は、その女子校では男女交際が禁止されてるんです」

「プライベートがどうよ」

ପାଇଁ କାହାର କାହାରଙ୍କୁ କାହାରଙ୍କାରୁ

「ちあは、コーヒーをすすつている彰士の隣へ座つた。
「でも、それを守つてゐる人なんて一年生どぐく一部。

合っている人がいるんですね

「へえー」

「……それが、その先生にバレて……」

「バラして欲ほばれば
わお」

「で、その齋白の内容は

と、彰士が問うと黙り込

そんな彼の足をちあは思いつきりかかとで踏む。

そしてなに「」ともなかつたように、笑顔で

「無理しなくていいよ。落ち着いてからでいいの」

卷之六

「てんめええええ！！！いでーし！おい！無視すんな！」
「ううつううなあ。吉田らや」の二二所聞二二フらう

「すいませんでした」

「あの

Г Г !

「お話し続けていいですか？」

「構わねーよ」「いいよーっ」「構わねーよ」「いいよーっ

「あら、と……で、あ……」

「…ひど」

「ありえねー」

「…嫌なんです…本当に…でも、でも…次傷つける相手が…私の…親友で…」

「そりゃいかんな…」

「どうか…どうか…」

崩れるように泣き始める彼女。

「…おい、ちあ…」

「はい?」

「お前…」この高校の服って…」

「ああ…さつき見せた可愛いヤツでえへへ…つて、ハツ！」

悟るちあ。

「ガンバレ」

「うええええええ…」

こうして、ちあの女子高偵察が始まった。

「あのお、その女子校って茶髪ロング毛ありますかあ
脱力氣味に聞くちあ。

「髪の毛は自由です」

「うおっし。カールかけちゃお」

女子力（笑）が發揮できる無駄なチャンスである。

case6 女子校と脅迫？

翌日。

「ここにちはあー 転校生の乾 ちあでーっすー。」

.....。

教室に走る沈黙。

「あれ？こーゆーのつてやつぱうけない？」
頬に人差し指をつき舌を出して言つ。

「つまんなーい。せんせつ 席教えて」

「え、ああ、一番後ろの窓際です」

「ありがとー」ざざこますつ

「ね、ねえ、なにあの子…」「ああ？」「どうから来たのかも秘密
らしいよ」

評判、最悪である。

だがそれでいいのだ。評判がよく、友達でも作つてしまえば行動し
にくい。

単独行動で手つ取り早いのは、嫌われる」と。

「ねえ」

誰かのその一言で、教室が静まった。

ちあが横目で入口を見ると、いつほそつなメガネ先生が立っていた。
(あれかあ)

一日で確信した。きっと、あの女が“犯人”と。

「このクラスに来た転校生…呼んでくださいる？」

皆が呼ばず、田で教える。だが先生は、気付いていたが気が付
かぬフリ。

「あつ はあーい！私でーす！」

と、自らでその修羅場に躍り出る。

「ちゅうとこりゅうしゃー」

「ふあーー」

「あなた…男性と交際してゐるでしょ」

「してませーん」

「…嘘おっしゃー」

（いや、つーか、僕男だし）

「してないです」

「…騙されないわよ」

（嘘だら…こいつアホじゃねーの）

反面キレつつ、続けて同じ言葉を繰り返す。

「してませーん」

一語一語強く言つ。

「呆れたわ…そこまで嘘を通すのね」

（なんだこいつ…まさか）

「せんせー、それ片つ端から言つてるんですかー？」

「はー？」

図星。つていう顔をする。

といつか、顔に書いてあるつてこんな感じなんだつてチアは思った。
「いやー、なんでもないでーす。でもでもつ 私付き合つてる人いませんつ」

ウルウルと瞳を潤わせて、拳をほほに持つて行きぶつてるポーズ。
それに軽く引いてメガネを抑える。

「ふん、信じてたまるもんですか」
ちあの笑顔も、そこで切れた。

case7 女子校と脅迫？

ブチン、という効果音が出るぐらー、ちあはキレた。
彼の沸点は低くはないものの、あれほど信じてもうれしくいれば誰
でもきれるだろ。」（多分）

「ふざけんじやねーみー」

低く小さく言う。

「おまつ 信じてねーしかいえねーの? つーか! 生徒信じてねーの
! ?」

「なつ 何様よ! その口の利き方は!」

「るせーよー証拠上がってんだ! ! 警察もオモテ来てんだぞクソバ
バア! ! ! !

「んまつ……」

「年齢詐欺した挙句結婚詐欺!

生徒は全く信じねーし、しかもその生徒の弱みを握つて物事押し
付ける!!

ふざけたババアだぜ! ! てめーなんぞ… ブタ箱がお似合いだわ! !
たばれブス! !

「な……誰に物を言つてると思つてるの!」

「成り上がりの新人教師サマですがあ?」

「まつ…ふ、ふざけるのも大概にしな……

と、そこで彼女の口は止まつた。

「あ? んだよ、続きをよクソバ

「乾君、続きを私は私が

「うおつ」

声を聞いて後ろを向くと いたのは…

「あ…天根さんじやないですかあーー お久しづりつ

いつもの声に戻して、言ひ。

天根 総一郎。

数多の事件を解決してきた有名刑事だ。一般人でも知っている…ほど。

「あ、天根さんですって?…そんな刑事様が私に何のようで…」
「君に少し…いや…大分悪いコトが絡んでてね。署までご同行願う
よ」

「う、嘘よ嘘よ嘘よ…私がやつてきたのは正しい行い
パン、と。乾いた音が響く。」

「正しかつたら、人は傷つかねーよ」

「……そ、行こうか」

「……嘘嘘嘘嘘嘘嘘ありえない…」

天根刑事の部下に連れられ、車へと歩いて行つた。

「乾君」

「何ですかあ」

「……あれは、昔の自分を移してた本心だらう」
「……嫌いですよ、そーゆーの。過去とか、掘り起さないでください

いよ」

「悪かつた…、外で須野君が待つてたよ
「はあーい」

『ちあは、ちあひちゃん。お次はヴァイオリンの練習よ』

ちあは、小さじ頃両親を亡くしてからずっと叔母と住んでいた。その叔母は所謂“完璧主義”で、息子にも娘にも嫁にも何もかも完璧にこなすように仕込んできた。

そのせいで彼女の周りの人間は次々と彼女の元を離れ、しまいには死ぬ人まで出た。

だが叔母はそんなことなど気にせず彼にも仕込みを行おうとした。

最初はちあも、構わないとと思っていた。
いい成績も出せたし、能力がつく。

だけど高校生のある日。

「これじゃダメじゃない！…どうして、この成績なの？」
成績は、悪くなんてない。むしろ、良いぐらいだった。
「ダメだよ、ダメダメダメダメダメ…“良”じゃダメなの…“優秀”じゃないと…いいえ、それ以上よ…」
ちあは、思つた。

この人の“完璧主義”は病氣だと。

「あなたは、私の養子なのよ…完璧完全じゃないといけないの…」
彼女がこう言えば、

音楽だつと、スポーツだつと、勉強だつと、なんだつと。
全て血が出るまでやらされた。

市内で一位は許されず、県内で一位も許されず、地区で一位さえ許されず、地方で一位だつて許されず、

全国で一位だからって許されない。

汗じやなく血を流して出した世界の結果だって、ぐちゅぐちゅしゃになれて、ゴミ箱へ。

彼女のせいで 僕が狂う

彼女がいると 僕が壊れる

今まで習つた習い事。きっと、100は超えてるだろ。今まで取つた賞状やトロフィー、優勝。いくつだったかなんて、忘れた。

どんなにそーやつて頑張つても。

ヴァイオリンを持てないぐらい頑張つても、ピアノが弾けないぐらい頑張つても、

竹刀が持てないぐらい努力しても、道着を着れないぐらい努力しても、

鉛筆がシャーペンが持てないぐらい勉強しても、これ以上頭にはいらないぐらい勉強しても、

バットがボールが握れないぐらい野球しても、ボールを蹴れないぐらいサッカーをしても

どれだけ頑張つても、彼女は満足しない。

努力して、最高の結果を出したら。努力して、ボロボロになつたら。

『じゃ、次はフルートね』『じゃ、次はギターね』

『じゃ、次はアーチェリーかしら』『じゃ、次は合氣道かしら』

『じゃ、次は……』

「……さへておせりも」

「あ…え、」めん

「え？」

“いつま

「典故」

「…めん…うなされてたから…」

「の」の接続

と頭を抱えた

氣に蘇るといつ、夢から醒めたのに懲り。

「
」

「……なあ、

「あ
?」

「寝言、微妙に聞こえたし」

「つはついてねーな、僕」

彼は、全てを吐き出した。

case 8 アイドル事情

* *

「……そんなことが……」

「……「ひん」

（つーか、よく考えりゃおかしーじゃん。家事もでかくし裁縫もなんだつて……ちいせえくせに無駄に強いし、知識あるし……。

そーいや、海外行つた時も何不便なく過ごした気がする……。まあ、俺自身も数力国語は余裕だけど……）

『いいつけ、そーゆーレベルとかじや成り立たないんだ。』

そう彼に思わせた。

* *

ルルルル、と電話が鳴つた。取つたのはちあ。

「はーい、もしもししつ」

『あ……あの……Jack of all trades……さんですか？』

「え？ はいっ そーです」

（あれ？ この声……すつごい聞いたこと……）

『あの、私……実は』

『あーつー！ ABC48の前野あやーーー。』

『……「」、ご存知で……』

「それで、ご用件はー？」

『は、はい……私たちのボディーガードと……』

「と言う訳で引き受けたのが、ボディーガード?」

「そ

ABC48とは、今人気絶頂中のアイドルグループだ。

電話をかけてきたのは今回の新曲でセンターに決まった前野あやこ。人気になるのはいいのだが、留守電や無駄に多い花束…などなどのストーカー被害が増えつつもある。

更に、ニュースにはしなかつたため、公にはならなかつたが…今回依頼者前野の私物が盗まれる事件が起きたのだ。これではまずい、と彼女はJack of all tradesに連絡したのだ。

「ま、本物に会えるいいチャンスじゃね」

「だよねーっ」

「で、その服何」

「ABCコス」

おなじみチェックが目立つ制服仕様のコスチュームである。そして、自作。

「あ、今回ボディーガードしてくださる方ですか?」
と、駆け寄ってきたのは板橋いたばしともとも友だ。

「私も悩んでたんですね…よろしくお願ひしますね!」

「おう」「はあーい」

今回はクイズバラエティー番組での撮影。場所は室内プールだ。不正解した人は真下の板が開きプールヘドボン、という仕組みらしい。

「暇だねー」

「ああ、ここも貸し切りだしビーセ誰もこねーだろ

「意外とあれじゃない？関係者とか」

「あるなあー」

「一人はそういうのぼのしていると、女性の悲鳴が聞こえた。

「ちあ！」

「分かってる……！」

声のする方へ、一人は駆け出した。

case 8 アイドル事情（後書き）

てゆーか、ストーカー大杉ワロス

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1149ba/>

Jack of all trades

2012年1月8日22時50分発行